

資料2 第1回協働のまちづくりのあり方検討会の意見まとめ

(1) この10年で生まれてきた成果

- 成果①:対話を重ねることで、地域課題に応じた活動につながってきた**
- ・若い親世代と、ラジオ体操や餅つき、クリスマス会など「何をしたいか」を直接話し合い、一緒に実現してきた。
- 成果②:活動がつながり、協働の実践と共創の芽が出始めている**
- ・藤江の「オアシス」は、住民の提案を行政と山陽電車が受け止め、三者の協働によって実現した。そこで主体的に動いた経験が、コミセンでの図書活動など別の活動にも広がっている。
- 成果③:まちづくり以外の分野でも、地域に関心を持つきっかけになってきた**
- ・中学生のときのトライやる・ウィークで地域と関わった経験が印象に残っており、その経験が現在の地域活動への関わりにつながっている。
- 成果④:市職員が地域に伴走しながら丁寧に支援してきたことで、行政側にも協働を進める力や文化が蓄積した**
- ・明石市の職員は、市民との対話や協働の中で鍛えられ、「住民とともに」という力を高めてきた。
 - ・複数の部署が地域と関わってきたことで、協働のまちづくりについては、比較的横につながる文化が積み上がってきた。
- 成果⑤:地域住民の取組が、明石の暮らしやすさを支えてきた**
- ・明石に住み続けたいという市民の評価の背景には、市長や行政の努力だけでなく、各校区の会長や役員、地域住民が地域を良くしようと取り組んできた成果も大きい。
- 成果⑥:地域活動への参加が、次の活動や新たな担い手につながることもある**
- ・中学生が親子実験教室の講師を務める取組が人気講座となり、小学生のときに参加した子が、中学校で科学部に入った例もある。

(2) この10年で見えてきた課題

- 【① 誰もが自分に合った形で関われる環境が十分でない】**
- 課題①:活動を支える人が限られ、活動の継続に不安がある**
- ・人口はいるものの地域活動に関わる人が少なく、昔からの住民だけで運営している地域がある。
 - ・子ども会の人数が次第に減り、最後は同じメンバーだけで活動していた。
- 課題②:関わりたい人と活動がつながりにくい**
- ・PTAが終わると地域との関わりが切れたり、退職後に地域との接点を持てなかったりする。一人で既存の組織に入ることも難しい。
 - ・新住民にとって、自治会やまちづくり協議会は非常にハードルが高く感じられることがある。
- 課題③:中学生・高校生になると、地域との接点が少なくなる**
- ・地域行事は小学生以下を対象にしがちで、中高生がどのように関われるかは十分に考えられてこなかった。
 - ・中学・高校時代がコロナ禍と重なり、地域と関わる機会が大きく減った。
- 課題④:障害の有無にかかわらず、誰もが担い手になれるという視点が十分でない**
- ・障害のある人を支援の対象としてだけ捉えず、一人の担い手として、誰もが主体的に関われる地域をつくることが重要である。
- 【② 人・活動・場所が見えにくく、つながりにくい】**
- 課題⑤:各分野の取組が、地域の中で見えにくく、つながりにくい**
- ・分野型の市民活動と地域活動がつながりにくく、両者をつなぐコーディネーター的な人材が必要である。
- 課題⑥:地域の拠点が、誰もが気軽に集まれる場所になっているとは限らない**
- ・「ふれあい広場」は公園利用者が立ち寄りやすく見えるものの、実際には、誰もが気軽に集まれる場所にまではなっていない。
- 課題⑦:「やってみたい」と思ったときに相談できる場所が少ない**
- ・地域に役立つ活動をしたいと思って、どこに相談すればよいか、まち協とどのように関わればよいかわからず、活動が進まなかった。
- 【③ 活動を支え、続けるための基盤が十分ではない】**
- 課題⑧:地域活動を支えるお金や仕組みを考える必要がある**
- ・地域交付金は大切な仕組みだが、与えられた予算の中で何を削るかという引き算の発想になりやすい。
- 課題⑨:行政内部の連携状況が十分に見えていない**
- ・コミュニティ・生涯学習課以外の部署が、まち協をどのように見て、どの程度頼りにしているのか知りたい。
 - ・各部署がまち協をどのように捉え、これまでどのような関係をつくってきたか整理する必要がある。

(3) 次の10年に向けて、大切にしたいこと

- 【① 一人ひとりの参加を支える】**
- 今後①:一人ひとりの「やってみたい」を拾い、実現につなげる**
- ・日常的な声かけや雑談の中から「やってみたい」を拾い、小さな企画を実現することで、その人が次の企画メンバーになっていく。
- 今後②:多様な「関わりしろ」をつくる**
- ・祭り全体を担ってもらうのではなく、「この部分だけ手伝って」と参加できる余地を増やすことが大切である。
 - ・一部分だけの参加でも、生きがいや別の活動につながる可能性があり、多様な関わり方をつくる必要がある。
- 今後③:誰もが担い手になれるようにする**
- ・性別、世代、立場の違いを越え、一人ひとりの「活動したい」という思いを引き出し、つなぐ機会をつくる必要がある。
- 今後④:情報を関心や参加につなげる**
- ・情報を出せば伝わるわけではなく、若者が「このまちは面白い」「関わってみたい」と思える方法を考える必要がある。
 - ・SNSであっても必ず見られるとは限らず、情報を見ること自体にメリットがある仕掛けが必要である。
- 【② 子ども・若者と次の世代】**
- 今後⑤:子ども・若者が役割を持てるようにする**
- ・播磨町では、コミセンを拠点に、中学生が地域行事の司会や手伝いを行い、地域の大人が支えながら中学生が主体的に動ける仕組みをつくっている。
 - ・年に一度でも祭りなどで地域の役に立ち、役割を持つ経験が地域への愛着につながる。
- 今後⑥:次の世代が自分たちでつくり、楽しめる余地を設ける**
- ・今の活動をそのまま「引き継いでください」と渡すのではなく、次の世代が自分たちでつくり楽しめる余地を設けることが重要である。
- 【③ 人・活動・場所をつなぐ】**
- 今後⑦:人と人、活動と活動をつなぐ人を増やす**
- ・生活支援コーディネーターを福祉だけの人と捉えず、まち協、コープ、NPOなどと連携し、地域でやってみたいことを応援する人を増やしていく。
- 今後⑧:優しいコミュニケーションを大切にする**
- ・相手の話をまず受け止め、「一緒にできる人を考えよう」と伝えることや、日頃からあいさつをして顔の分かる関係をつくることが大切である。
 - ・人を活動に引き込むには、日頃のあいさつや声かけが基本であり、顔を知ってもらうことが安心感につながる。
- 今後⑨:多様な場所を地域の拠点として生かす**
- ・コープの店舗など、公共施設以外にも地域の「やってみたい」を実現できる場所がある。
 - ・自由に活動できる場所があると、人づてに新しい人や活動がつながっていく。
- 今後⑩:まち協を、多様な人や活動をつなぐ場とする**
- ・まち協が他の担い手と一緒に、多様な場や機会を用意し、地域での関わり方を増やす役割を持つことが考えられる。
- 今後⑪:市内に住む人だけでなく、関係人口とのつながりも考える**
- ・市外にも明石のファンは多く、市内に住む人だけでなく、関係人口として明石のまちづくりにどう関わってもらうかも今後の論点になる。
- 【④ 持続可能な仕組みをつくる】**
- 今後⑫:活動を持続させる資金や仕組みを考える**
- ・活動によって資金や価値を増やす発想や、収入を得ること、担い手に少し報酬を出す工夫することで、活動の意欲につながる可能性がある。
- 今後⑬:行政も縦割りを超えて地域に伴走する**
- ・地域が分野を越えて協働するのであれば、行政内部も縦割りを越えて変わる必要がある。